一般の部

入賞

広島県知事賞

島

始まりの時は
うっすらと青く
内界に結露した
母なる水球に
浮かぶ魚鱗のひとひら
朝霧は晴れ
かもめは飛び立ち
揺れる波間に
凛として湧き上がる島

もう帰ることはできない
白い灯台の立つ岬に
還って行く潮流は

三原市　長光　祐三

大きく弧を描いて
ざんぶざんぶと洗う
沖積世の岩塊の
てっぺんに刺さる
黒い銛のうた

午後の白砂青松に
ふと起こる風に巻かれて
柑橘の香り立つ島
水球の極点に裂開する
空洞の寂寥から島は来る
榊の葉　甘夏蜜柑　山の幸
沖の岩礁に残された供物が
波に浸されて
夕凪の海を流れる

私は呼びかける
日没の朱筆に染まり
潮の巡りが帰還する島に
星蝕の夜に遊ぶ
海蛇の白い腹のぬめりに
深海の眠りの底の

透きとおった島の夢見に

波の間に
星が揺らめく磯を想う
私はこれから何処へ行こう
砂浜に打ち上げられた
クモヒトデを海図に這わせて
行く先を決めようか

月は潮流に直立して昇り
干満のたびに
銀河の滝が流れ落ちる島
灯台の黒い岩場に住まう
海の老婆が詠い伝える
千年の言葉を聴く

おまえ
海髪(イギス)を食え
海髪(イギス)を食え

【注】海髪（イギス）＝潮間帯の岩礁または砂礫に付く暗紫色で毛髪状の海藻。海髪豆腐としてからし味噌等で食べる。

広島県議会議長賞

白い道（2）

庄原市　奥井　久子

舗装される前の百メートル道路を
祖父と二人で歩いてきた
原爆症で入院している父を見舞うため
歩きながらの祖父の一言
「この踏んどる白い石は人の骨じゃ。」
思わず祖父に走りよったわたし
なぜだか怖かった

病院に一泊
少し回復した父が　わたしと散歩すると言う
闇市で買っておいた紅色の革靴を
わたしに履かせたかったのだ
革靴なんて　シンデレラの世界のもの
カツカツと鳴る踵にわくわくした

晩秋の朝の幽かな光が微光となって
路面を斜めに照らす

道は今朝白く淡く光って見えた
小学生のわたしにとっては　道ではなかった
殺伐とした荒野がまっすぐ続く

ザクザク　ザザッ　ザザッ
ザクザク　ザザッ　ザザッ

靴底で砕ける白い石
ストローみたいなものもある

二人は比治山の方に向かって
百メートル道路を歩いた
「白い石は人の骨だよ。」
祖父の昨日の言葉が蘇る

父はその事をわかっているにちがいない
でも父は何も言わなかった
「その靴いい色だ　よく似合う。」
父はわたしの足元ばかり見て
満足そうに微笑んだ
はれやかで　おだやかな父の笑顔

ザクザク　ザザッ　ザザッ
ザクザク　ザザッ　ザザッ

次の年の春　三十九才で父は逝った
燃えさかる街に入り叔母を探し続けた父

百メートル道路は平和大通りとなり
街路樹は大木となり
ヒロシマは復興した

焼け野原に一本大きな道を通した人々
今になって感銘を受けた
平和とは作っていくことかもしれない

私は忘れない
舗装の下に多くの人々の骨が
眠っていることを

ザクザク　ザザッ　ザザッ
ザクザク　ザザッ　ザザッ

現　代　詩　部　門

広島県教育委員会賞

誕生

スーパーブルームーンの前夜
お散歩中に蝉の羽化をみた
抜け殻かと思い通り過ぎたが
なにやら白く抜け光っている
柔らかく湿った、羽だった
やがて細長い六脚(ろっきゃく)も見えてきた

しばらくじいと見とれていたが
様相はあまり変化しない
そのうち私はその脚(あし)に
祖父のつるんとした太ももを重ねた
白くて女人(にょにん)のような、とても長い脚
脛骨(けいこつ)が左右かたちんだったから
兵隊にとられなかったと教えてくれた
出征していたら祖父は死んでいたと
パパはいないし、私もいないと
幼心に私は、祖父の脛骨に手をあわせた

安芸郡坂町　石口　阿希

月明かりのもとで神秘的にうごめく蝉は
すこしだけ苦しそうにも見える
長い地球内生活から這い出して
ようやく羽ばたこうとしている
精一杯、鳴くだろう
夏の終わりになんとか間に合って
月のエネルギーに満ちたこの夜に
きみは生まれた

おなかの赤ちゃんがエールを送る
「半年後に生まれるよ。いっぱい泣くよ」
と、私のおなかで木霊（こだま）する

きっと明日には大空を
まだ見ぬ世界を飛び回る

こわかったでしょうこの世の中に
生まれ落ちると決意すること
勇気を出して
パパとママのところへ
舞い降りてくれてありがとう

繋(つな)がる、いのち
どこかで切れていたら
なかったはずの、このいのち

蝉は依然もぞもぞしている
私はゆっくりと、歩き出す
もうすぐ会える
愛(いと)しい我が子と向かう
パパの待つ
クーラーのきいたリビングに

現　代　詩　部　門

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

誕生日

廿日市市　和崎くみ子

七十三回目の誕生日を迎えた

いつの頃からか　誕生日は
一年で一番大切な日　と思うようになった
あっという間に嵩を増し
大きな数字になってしまったが
気持は変わらなかった

今年は本を二冊で祝った
昨年は真ちゅうのブレスレット
一昨年は手作りのウォーターグラスひとつ
その時の自分に見合ったものを
自分で選んで　自分にプレゼントする

ある時　カレンダーを見て
途切れなく記念日や行事が押しかけてきて
踊らされているようで

大切にしたい日について考えさせられた
それからである
自分の誕生日を中心に
ささやかでいい祝っていこうと決めたのは

ケーキやシャンパンなどは必要なく
誰かに祝ってもらうことも期待せず
いつもと特別に変わらない日を過ごし
夜　寝る前に自分につぶやく
「また一年間よろしく」と

こんな誕生日を過ごすうち
こんな祝い方が好きになった
いくつになっても自分を産みだすようで――

今年は特別に思ったことがある
父も母も兄も見送った
墓仕舞いも済ませた
実家仕舞いも何とかやり切った
大変な労力を要し　費用もかさんだ
すると　あと七年
私にはご褒美のような年月が残った

会いたい人　行きたい所　やりたいこと
に向かいあうことができる

根拠のない　漠然とした七年だが
短いか　長いかは問題ではない
私の目の前に手つかずの時間がある
それがうれしいのだ
自分の感覚　能力　経済力に見合った
挑みができる
輝くような空白の未来を
ありがたくいただくことにした
この先　さらに年月を更新できるかどうかは
だれにもわからないこと

七十三回目の誕生日は
こうして過ぎ
また三百六十五日の船出をしたのである

現　代　詩　部　門

広島市長賞

黒ダイヤ

陰鬱が好きです
少し暗い気分のときが好きです
ネガティブだと思考が冴える気がします
たまに、明るいものを
否定したくなってしまいます――

いつからでしょうか
ポジティブな思考に
苦手意識を持つようになりました
「頼りになる」と言われれば
言葉が心まで届かなかった感覚がします
「頑張って」と言われれば
この頑張りでは足りないのだと感じます
「ありがとう」と言われれば
お礼を言われることではないと考えます
それらはきっと
自分に自信がない表れなのかと

廿日市市　野田友里恵

ポジティブな言葉を
自分の中で
身勝手に
変換
して――

ああ。

それでも暗い思考は嫌いになれません
周囲をシャットアウトして
自分自身をそっと見つめる
いろんなことを考えられる
良い意味での孤独
1人の時間は美しい――

漆黒(しっこく)。
百人茶(ももしおちゃ)。
黒紅(くろべに)。
濡羽色(ぬればいろ)。
どれも黒味が強い色
暗いもの
それでも言葉は美しいばかり

空だって
夜空は暗くて暗くて
全てを闇夜に閉ざしてしまう
それでも星々は輝いていて
どこかに佇む月は
この上なく美しくて

きっと光る星は自分の姿が見えていない
周りがあまりに光るから
そこばかりが見えてしまって
世界が急に暗くなる
自分だってこの上なく輝いているのに

ポジティブな心には
花が咲き乱れている
そしてネガティブな心には
星が輝いている
だから私は
暗いのも陰鬱なのも
好ましく思うのです――

現　代　詩　部　門

広島市議会議長賞

波の光の幻相

三原市　末国　正志

島影重なる海を山道から見ていたときだった
胴体と同じ塊の熱に背後から突然射通され
何かがわからないものが
ずわーっとわたしから引きもがれていった

直後　眼下にうるむ海峡の小島の磯に
波はぐぐっと噛み込み
それは押し引きをゆるく繰り返すローラーだった
水にふくらんだ薄紙のようになった島は
ローラーの力具合で破れてしまいそうだった

磯を打つ波の光は幻相になって空に疼き
沖まで晴れ渡った海の風景の重さに
押されつつ押し返しつつ抗っていた
わたしからもがれていったものが
まさにそこに在るようだった

抜け殻であるのかもしれないはずのわたしの内にも
傷口のほてりのような蘊気だけが渦を巻き
抜け出たものを蘊気の中に手繰り寄せて
その力がわたしを
（此処にしかいないわたし）に戻した
けれどもその一部始終すべてはわたしの意識の働きではなく
わたしは何をも為せずただ山道に立ちつくしていただけだ

その晩母に語ると
怪訝な顔をすることもなく母は言った
「わたしのお母さんが　あなたに来たんじゃろう」
その出来事は　敗戦後満州からの引き上げのさなかに果てた
わたしの祖母の故郷の島でのことだったのだ

それから数箇月が過ぎて
母の言葉の底意がにわかにわたしに翻った
愛娘が故国へ帰り着き大地を踏んだそのとき
最期の悲願が叶ったのを天から見届け
祖母は愛娘に永却の別れを告げるべく
母の体をまっしんに射貫いて
大地に四散したのであろうと
きっとわたしに来たようなあの烈しさで

会うこと叶わなかった祖母を恋慕する
わたしの情念の堰があのとき破れたのだ
死の淵に立っていたのだろうかと
あとあとまでも思われるような烈しさで

引き上げ船が出る港町の近くまでたどり着きながら
墓標もなく大陸の辺土に未だ熱い骨を埋め
骨片だに故国に眠ることはない祖母の
無念として帰り来るしかない熱と
あのときわたしは
祖母の故郷の空に運ばれて
つかの間まみえたのである

現　代　詩　部　門

広島市教育委員会賞

シロとサイレン

シロは兄が拾ってきた小犬
まっ白な毛なのでシロと命名
兄は自分の部屋で飼っていた
母が掃除に入って来る迄は、
シロの事がバレた後は
庭に犬小屋を置きシロは小屋に移住
一年もしない内に
シロは大きな犬に成長
耳はたれ、茶色の眼はキラキラ
体毛は白から茶色に変化
四肢はしなやかで速く走りそうだ
兄は高校生で帰りが遅くなった
シロの世話は私に回って来た
朝夕の餌の世話
一日一回の散歩は欠かさない事
私は学校から帰るとシロと走ります
みかん畑　野菜畑　田んぼの畦道

広島市　大木　純子

光る海辺でひと休み
貝殻を拾ったり、
波の音を聞いたり、
夕食が終ると残飯を集める
シロは音をたて、勢い良く食べる

彼には特技が二つある
一つは履物のコレクション
私のサンダル　母の下駄
父の靴　兄の運動靴　等々
不思議な事はそれぞれが片方ずつ
もしかしてと私は床下に入ってみた
田舎家の床下は高く出入可能だ
床下の土を少し掘り返す
出るわ！出るわ！　出るわ！
サンダルに下駄や運動靴
見覚えのない靴まである
もう一つの特技は
村のサイレンと共に吠える事
村では朝昼夕に三回のサイレン
その音は高く高く響きわたる
シロは姿勢を正して吠えはじめる

そして終わる迄吠え続ける
吠え終わり身体を横たえる
あたかもひと仕事終えた人間の様に

私が中学生になった頃の事
「野犬狩りの車を見かけたよ！」
友人が教えてくれた
授業が終わり急ぎ足で帰った
物干しの柱に縛っていた鎖と首輪
ダラリと放り出されていた
いつも
学校から帰ると
飛び上って迎えてくれた
しっぽを振りふり
私の顔をよだれだらけにした

サヨナラ　シロ
サヨウナラ　シロ

現　代　詩　部　門

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

枯露柿

広島市　玉本祈世夫

老人会が公園でGゴルフを楽しんでいたら
近所の主人が庭の鈴生りの柿を指さして
渋柿じゃが拠いでくれんか言うて来んさった
競技が終わったけえみんなで採りに行く
何ぼでも言われたが遠慮して三十個貰った
　家に帰ると早速女房がせっせと皮をむく
俺が二階に上がってベランダに紐で吊るした
日当たりが良いけえ干し柿にはうってつけ
女房が洗濯を終えたら　俺が乾しに上がって
柿の乾き具合を確かめることにした
　三週間位経ったところで一個外して食うた
夕方洗濯物を取り込んだ女房が不思議そうに
干し柿は三十個の筈なのに二十九しかない
まさか摘み食いはしてないよね　疑われた
摘み食いはしとらんが試食したでと白状
　大晦日見栄え良い枯露柿を御仏前に供える
来年は早めに五十個位もろうて干そうか

福王寺山の天辺にあかあかと輝く夕陽が沈む
今年も家族六人が除夜の鐘を聞きながら
元気で年越し蕎麦を食えれば良いが

入選

微睡む

東広島市　天野　節子

親指のマニュキュアが半分残っている
それは四か月前の事である
声楽家のお誘いでオペラに参加する
若き声楽科の学生とプロのソリストに交わり
後期高齢者もぞろぞろと楽しむ
どうも通行人のような村人らしい
されど異なる場面ではドレス着用も
半信半疑で参加する事にする
コーラスで鍛えた声で勇気を出してみる
練習が進むにつれシルバーながら
欲がみなぎる
西洋人の場面で着るドレスも吟味する
準備万端意気込んで気合いが入って来た
練習を重ねるうちに江戸時代の時代背景にいる
どうも我々は裸足らしい
藁草履も履かないなんてね

仕方がないシルバーでも指にマニュキュアをする
地味にして欲しいとの事　口紅も辞める
それでもドレスの場面では前列での合唱も出来
不思議な体験を楽しみ感激の涙も湧いてきた
小オペラ「忘れられた少年」
幸せの輪の中の一人であった
青春を謳歌するシルバーである
後日動画オペラ「忘れられた少年」を見る
心は青春時代ながら
動画の中の自分の姿に感激する
映像の中の私は演技など不必要
シルバーそのもの
少し猫背な姿勢も演技では無い私なのです
ひっつめたヘアスタイルも老女そのもの
それが現実なのです
やれやれ舞台では転ばなくて良かったわ
本意でなかった裸足も私を助けたのかも
マニュキュアの残る指は名残り惜しくて
除光液は使えないでいる
舞台の背景に成った自分を讃え
今後のお誘いは卒業する事とした
後期高齢者ってこうゆう事ね

これからは自分が主人公
残りの人生を大切に
夫婦仲良くのんびりと阿吽の夫とブランコで
微睡むこととしよう
オペラ「忘れられた少年」に乾杯

現　代　詩　部　門

明日へ向かって　チェンジ

三次市　立田　幸子

美容師の巧みな　鋏(はさみ)さばきで二〇センチ余りの白髪が
床へと　散って行く

伸ばし始めて　一五年
追懐(ついかい)する数々の出来事

ハワイの潮風と　陽光の中　挙げた娘の結婚式

突然告げられた
夫の余命

相次いで世を去った
夫　義兄　実父(じっぷ)
続いた愁嘆(しゅうたん)

「良くお似合いですよ」

美容師の声に　よみがえった現実
短髪写す鏡の中
変身した
古稀　目の前の顔が

よく耐えて来たねと・・・・
微衷（びちゅう）の光が

八十路の我の夕焼け小焼け

八十歳　よくも永らえ生かされ来しものよ
父母逝き兄逝き　義父母も逝きたもう
そして、夫よ　あなたまでも逝かしめぬ
我に遺されしは
田畑そして　奥地にわずかなる山林

田は今風の波に乗り　構造改善の仲間入り
巨大な田んぼに変われども
いずこが自(し)が地か解るなし
図面の上にポッチリと赤い囲いが見えるのみ
秋の実りの穂は揺れど我の米にあらざるに

畑は独りの我には広すぎぬ
取っても取っても草茂り
わずかに作る夏野菜
カボチャにスイカにさつま芋
夜ごと出で来る猪が、これでもかと荒しゆく

世羅郡世羅町　高本　澄江

昼は空からカラスたち
トマト、モロコシを試食する

義父母や夫の買い求めたる山林は
松茸どころか　松木も枯れて
大藪小藪ススキが繁り
人の入るを拒みいる
境を示す杭木も石も深き落ち葉の下となる
道に張り出す木の枝を
切れよ切れよと　人は騒げり口々に

八十路の迷子のこの我は
新聞チラシを広げつつ
豪華客船世界の旅　密かに夢に描けども
腰の痛みに歯の痛み　目は近くして耳遠し
思いを馳せるはただ一つ
生れ故郷の夕焼け小焼け
小さき盆の踊り唄　小さき盆の踊りの輪
狐に化けて帰ろうか
カラスになって飛んで行こか
夕焼け小焼けの消えぬ間に

澄江よ　我にはよき人生であったぞよ
遺影の夫は笑みおりぬ
浄土は今日はお盆だぞ
この歌声が聞こえぬか　浄土の盆の踊り唄
浄土の門(かど)で　両手を広げて待ってるぞ
お前の命の尽きなんその日まで

幾々代も守り耕し来たる土地なれど
山も畑も野に還えせ
猪、鹿の遊び場に
ハトやカラスの楽園に
コオロギ、バッタも喜ぼう

令和もコロナも知らぬ夫よ
八十路の道は険しかり
今日は三十五度もの猛暑日ぞ
太陽さえも味方せず
されどされど　明日は明日の夕焼け小焼け
明日は明日の風が吹く
それを信じて眠ろうぞ
それを信じて生きようぞ

現　代　詩　部　門

会社の温度

こちらから声をかける前に
話しかけてくるお客様がわかるようになった
入ってくるなり
なりふりかまわず話してくるお客様もわかる
話し相手のいないさみしいお客様は
自分の知識を喋り続けて話が終わらない
どちらにしようか迷っているお客様は
話がしたいだけ
とっくに決まっている
私の身体は熱くなったり冷たくなったり

仕事に追われていても
従業員が店内の冷房の設定温度を下げる
休憩が終って戻ってきた従業員が
寒いと設定温度を上げる

同僚の仕事が遅いと陰で不満を言う人がいて

広島市　中村　京子

変なものでも見るように無視する人がいる
更衣室では店長が
お気に入りの子だけ可愛がると文句を言う
誰かの目につかぬように
足手まといにならぬように
悪口は相槌を打つだけ
誰にも届かない
私の感情は会社で冷めていく

私はどこにいっても
空調の温度がなじまない